Photo by Fuminari Yoshitsugu

ALYSON SHOTZ

アリソン・ショッツ [b.1964]

光をとらえる彫刻家

➡P.15

ルイ・ヴィトン表参道ビルの最上階にある「エスパス ルイ・ヴィトン東京」。東京の街並みを一望できる天上のアートスペースに足を踏み入れた瞬間、思わず息を呑んだ。燦々と差し込む自然光を凝集して、結晶化したようなインスタレーションがそこには広がっている。作者であるアリソン・ショッツは、この作品を《光の幾何学》と名づけた。「アーティストとして彫刻を始める前は、大学で地質学を学んでいました。もともとSF小説や科学が大好きで、見えないもの、触れないものに興味があった。光を彫刻にしてしまうなんて素敵でしょう?」。

本作に使われているのはフレネルレンズという特殊なレンズだ。シート状の拡大鏡などに用いられ、これを通して見た図像は大きく歪む。離れたところから作品を眺めたり、近づいてみたり、真横から覗き込んでみたり……。立ち位置を変えるだけで、レンズの中の風景は変化し、作品の印象も大きく変わる。「見え方が変わるという要素は、私の作品のキーポイント。私が彫刻を始めた頃、女性の彫刻家は数えるぐらいしかいなくて、作品も量感のある男性的なものが大半だった。私が目指したのは、力強く、ボリュームも感じられるけれど、自由に変化していく彫刻。そのための素材として、光を発見した時はすごく感激したのを覚えています。特に、この空間は時間によって光の印象がまるで違うので、ぜひ何度も訪ねてほしいです」。

本作以外にも、立体、写真を用いたプリント、映像作品(1階の店舗フロアーで上映)が展示される本展は12月25日まで続く。秋から冬へと移ろう季節とともに、これらの作品の表情も大きく変わっていくことだろう。都市の喧噪をいっとき忘れ、光の世界に触れてみよう。